

張 慶在 (ジャン キョンゼ) (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程)

「アイヌ民族におけるタバコ 文化史的研究」

[1] 研究の目的と方法

本研究の目的はアイヌ民族における喫煙の歴史と文化を明らかにすることである。目的の達成のための具体的な方法として、まず北海道内にあるアイヌ民族関係の展示施設及びアイヌ文化継承者に対する現地調査を通して、現在のアイヌ民族の持つタバコに対する認識を明らかにする。そして、文献調査を通してアイヌ民族におけるタバコの伝来と普及、タバコ文化を明らかにする。

[2] 背景

アイヌ民族においてタバコは、社交や儀式の場で重要な役割をするなど単純な嗜好品以上の文化的な機能を持っていた。しかし、そのような文化は現在ほとんど伝承されていない状況である。

それについてはアイヌ民族に対する差別 とタバコの専売 という2つの理由が考えられる。

問題は二つの要因が複合的に作用し、現在アイヌ民族においてタバコは文化的機能を完全に失われてしまったということである。アイヌ民族の物質・精神文化の保存という観点から、タバコを巡る歴史と文化を復元する必要がある。

[3] 研究内容

(1) タバコの伝来及び普及

アイヌ民族は文字を持っていなかったため、いつどのようにアイヌ民族へタバコが伝来したのか正確に把握することはできない。アイヌ民族へのタバコ伝来に関する最初の記録は、1643年に北海道を探検したオランダ東インド会社所属の航海家マルチン・ゲルリッツェン・フリースの『日本北東探検誌』である。アイヌ民族の家を訪れたフリースは「タコイ・タンバコ(友よ、たばこ)」と言われ、持っていたジャバ産のタバコをアイヌ民族と一緒に吞んだと言う。フリースの記述から1643年当時アイヌ民族は既にタバコの存在を認知しており、喫煙文化を持っていたと考えられる。しかし、その以前の記録が残っていないため、それ以上時期を上げることはできない。

そして、タバコ伝来のルートについては、煙管の形から 本州からのルート、「中国大陸から黒龍江下を經由したのち、樺太に入った経路」、ロシア人によるカムチャッカ半島経由の経路という三つのルートがあったのではないかと北構保男は述べている。

伝来とともにタバコ栽培が行われた本州とは異なり、アイヌ民族が居住している北海道とサハリン、千島地域では気候条件上タバコ栽培が難しかった。

大正・昭和期の鉄道省・専売局の資料を見ると、青森以北では商品としてのタバコ栽培が行われていなかったことが分かる。しかし、家庭で小規模の栽培が行われていたという記述が残っている。たとえば、1881年発表されたハインリッヒ・フォン・シーボルトの『蝦夷島におけるアイヌの民族学的研究』には、「小屋には、小さい庭が付随し、場合によって柵をめぐらすような規模のものもあり、そこで煙草や玉蜀黍もしくは稗を栽培する」と書かれている。また、萱野茂も『アイヌの民具』で「わずかながら自家用としてタバコを栽培」、それを「トイタタンパク(栽培タバコ)といいます」と述べている。現在の状況については、タバコの製造は現行法違反であるため、事実上調査することは不可能である。

(2) アイヌ民族におけるタバコ文化

アイヌ民族においてタバコは、挨拶や社交の機能を持っていた。知里真志保は次のように述べている。

「外出 —特に遠出— の際は、必ず煙草入を腰にさして出る。それは単なる嗜好ではなく(中略)、他家

を訪問して、初対面の挨拶をするときには、必ず煙草を交換して喫煙し合う儀礼をやるので、それに備へるためであり、また煙草の有つ呪力によって、悪神の齎らす危害から身を安全に保つことができると信じてゐるからである。」

アイヌ民族の口碑文学に登場するタバコ（煙管）は、飢饉に襲われた村を助けるために旅に出る主人公を、危機から助ける情報提供者としての、人間の世界と神の世界を結ぶ仲裁者としての役割をした。

萩中美枝は『日本の食生活全集4 8聞き書アイヌの食事』で、タバコは「カムイノミ（神々への祈り）の儀式に無くてはならないものである。たばこの煙を神の国へ届ける大切な役目をするといわれる」と述べている。そういった特徴から、英雄叙事詩の中でタバコ（正確には煙管）が擬人化され、人間の世界と神の世界を結ぶ役割をしたのではないかと考えられる。

アイヌ民族の喫煙文化の特徴の一つは、タバコとほかの植物を混ぜて利用したという点である。

萩中美枝は前述の『日本の食生活全集4 8聞き書アイヌの食事』で「そのきざみたばこを、みかん箱一杯のやまぶどうやニセウ（どんぐり）の葉と混ぜて、たばことして吸うのである」と述べている。

なぜアイヌ民族がタバコとほかの植物を混ぜて利用したのかは明らかではないが、タバコはアイヌ民族の好物かつ儀礼的にも重要な意味を持つものであるにも関わらず、交易や少量栽培でのみ得ることができない貴重なものだったため、混ぜて利用したと推測される。

一方、タバコと一緒に利用した植物に薬草が多いことから、薬として利用したと推測することも可能である。知里真志保はアイヌ民族がタバコと混ぜて、もしくはタバコの代用として利用した植物としてノブキ、エゾユズリハ、ヤマブドウ、イソツツジ、コタニワタリがあると述べている。

(3) アイヌ民族におけるタバコに対する現在の認識

アイヌ民族におけるタバコに対する現在の認識を調べるために博物館調査と聞き取り調査を行った。

まず、博物館調査である。アイヌ民族のタバコ文化に関する展示・図録として、1977年に市立函館博物館が発行した『アイヌの喫煙用具』と、1996年に網走北方民族博物館で行われた「第11回特別展タバコと民族文化」及び同図録が挙げられる。常設展示の分析については、平取町立二風谷アイヌ文化博物館と網走北方民族博物館に対する現地調査（各々2010年12月5日、10月16日）を行った。両施設ともにタバコ関係の遺物を展示しているが、タバコと関わっている社交や儀礼については説明されていなかった。

つづいて聞き取り調査である。平取、阿寒、屈斜路湖の三つの地域で文化保存活動を行っている民芸品店・民宿の経営者を対象と聞き取り調査を行った。その結果、タバコ関係の物を文化伝承の対象としていないこと、関連商品の制作や観光解説も行われていないことが分かった。

[4] 今後の課題

(1) 研究意義を明らかにする必要性

アイヌ民族におけるタバコの持つ社交・儀礼的役割が現在どのような意味を持っているのか、当事者のアイヌ民族はどのような意識を持っているのかを明らかにする必要がある。

(2) 文献調査の有効性検証

短編的記述の分析が多いため、文献の比較調査を通してその有効性を検証する必要がある。また、開拓時代の公文書や市町村史、通計資料などを利用して文献の記述を補完する。

(3) 現地調査の補完

アイヌ民族を対象と聞き取り調査を行うのは様々な点で難しいが、可能な範囲でもっと充実した聞き取り調査を行う。また、アイヌ民族関係の博物館や資料館に対する補足調査も行う予定である。

以上